

主な意見等の整理（第1回）

（幼児教育と小学校教育の円滑な接続）

- 学校や園は学ぶことが楽しくわくわくできる場、子供が育つ場であることを改めて幼児教育側から発信するべき。
- 幼保小の接続を推進するにあたり、幼児期の育みたい資質・能力がより明確になれば、資質・能力に対する理解が深まるとともに、小学校もこの3観点で評価をしているため、相互理解も進むのではないかと。子供の見取りも共通になっていくのではないかと。
- 幼児期の教育と小学校以降の教育との教育課程上の接続を一層明確にすることが必要。10の姿や内容を3つの資質・能力の関係で整理し、そのつながりを見える化することが必要。
- 幼小中高という大きなつながりの中での教育課程を体系的に確認し、その上で幼児期がどのような役割を担うかといったことをもっと明確にするとよい。
- 幼児期の子供たちの育成方法が、小学校以降の学習の方法に生かせることを提言していくべき。幼児期に育んだ力は、環境を通してとか、状況を整えとか、あるいはプロセスの充実があり、それらを小学校以降のまさに学習の方法に整理することにより連続するものにしていけるのではないかと。
- この環境を通して行う教育という教育の原理を、幼稚園、保育園はもとより、小学校以降も教育方法のレパートリーにしていくべき。それにより、幼児教育と小学校教育で教育方法がそろってくる。上に従わせるのではなくて、下から育てていって上を作っていく。それで全体が整合するように18歳までのカリキュラムを作っていくということのベースの議論をしていくべき。
- 発達という筋道でカリキュラムを下から積み上げていくような議論で幼小を考えていくことが必要。逆に言うと、幼児教育の在り方や事実から、小学校はこうしてくださいというような議論をしていくのが大事ではないかと。
- 資質・能力というのが何か、それを育成するというのがどういうことかということを一層明確にしていくべき。
- 幼小連携を考えるときに、相手の小学校以降がどうなるかということが大きな問題である。小学校以降も大きく原理的に変化をしたが、実践がどうかというところは丁寧に見ていく必要がある。
- 公開保育や関係者評価を行うことにより、小学校との連携が進んでいくのではないかと。
- 小学校において、子供に委ねて創造力を発揮できるような単元、ユニットを創り出していくことが必要。個別最適な学びと協働的な学びと言われるが、子供観・指導観を問い直す機会ではないかと。子供の学びの連続性を考えていくにあたり、幼児教育の環境構成や子供の評価、捉え方について、小学校は学んでいくことが必要。
- 0～18歳の学びの連続性を踏まえれば、0～2歳から3歳への移行や乳幼つながりについての議論が必要。

(園での実践)

- 資質・能力を育むことに向けて、資質・能力とねらい・内容、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の関係性をしっかりと理解することが大事。
- 園では資質・能力をカリキュラムや指導計画にどう反映させるかということを考えることに直面している。各園では園の方針や目標、実態に基づいて資質・能力の概念を反映させた保育の内容を考え、文章化するという創意工夫を行うようになっている。
- 言語化する方法を明確にお伝えすると、しっかりと保育をどうするのかということを実感しながら保育に向かわれるという変化を感じる。例えば環境の構成とか教師の援助とか、あるいは狙いをどう具体的にすればいいのかという方法を明確に伝えていくということが大事。
- 園では10の姿を保育の過程でどう考慮するか、また、そもそも考慮するというのは一体どういうことなのか、またどうやって10の姿を使って園外機関等とそれを共有していくかなど、各園等の実態に応じた扱い方を検討している。
- 資質・能力や10の姿、ねらい、内容に基づく教育活動を各園が積み重ね、理論化していく際の創意工夫もある。資質・能力を一体的に育むための指導とはどういうものなのか。保育者が考え、実践して記録として積み重ねていく中で、資質・能力を育むその園なりの保育の在り方について、実践的な知見が見いだされていくことになる。
- 非常に精力的に取り組む園が増えてきた部分、その差も広がっているような印象もある。その差のポイントになるのが、環境を通して行う教育や幼児の主体性と保育者の意図のバランスというところである。
- 10の姿について、園のほうでは様々浸透してきているが、小学校には、まだ十分意識されているとは言えないのではないかと感じる。幼小接続の取組の中で、園を超えて保育を見合ったり、環境構成や援助について見直してヒントを得るといったようにつながっていくとよい。
- 10の姿を見とる研修や小学校の先生と共有して子供の姿を語る研修等が増えたが、保育内容の改善にどれだけ展開できたかという点、姿を見とる、語るというところで満足しているケースが多い印象。本来は、これがプロセスの質の充実につながるようにしていくべきもの。姿評価が子供の実態把握であるが、そこを保育の改善に向かう循環の中に位置づけていくことが必要。
- 子供の学びのプロセスの分析的観点として、主体的・対話的で深い学びの考え方を幼児教育でも生かしていくとよいのではないかと感じる。遊びと学びのプロセスが子供主体となっているか、そこに対話が詰まっているか、その遊びに深まりが生じているか、遊びのプロセスを見とる評価の観点が必要とされているのではないかと感じる。
- 育みたい資質につなげていくためには、定性的評価としての実践の記録の在り方やドキュメンテーションについて、より広く理解を深めていくということが大事。
- ドキュメンテーションにより、丁寧に記録をしたり、時間のない中で写真記録により少しだけでも振り返りや対話する風土を作ることや、更には、職員間、子供、保護者をどう巻き込めるかがとても重要。子供主体の遊びが学びである話を、保護者を巻き込みムーブメントにしていく仕組みを作っていくことが重要。
- 保育が教育である限り、保育者が願いや意図を持っていて、その視点から子供をきちんと評価していくということがなければ本当の意味で教育にならないのではないかと感じる。

- お稽古事的なものに保護者の方の意識が強かったりすると引っ張られていく。本来幼稚園教育要領で求めているもの、子供の育ちをどう実現していくかというところに軸足が向いてくるといい。
- 幼児教育が大事にしていることを一般の保護者がどのように知り得るのかというチャンネルがないのが一番の課題。
- 教材の開発については、成果を評価されるところがなく課題である。
- 組織マネジメントについては、小学校以降に比べると弱さがあるような印象。管理職を中心にどういうふうにチームとして組織をマネジメントしていくのかといった議論も必要。

(時代の変化に応じた保育方法の在り方)

- コロナ後の戸外の重要性、ICT・デジタルの有り様について議論していく必要がある。
- コロナと少子化の影響は想像以上に大きく、集団の在り方、保育者と子供、子供同士の関わりについて改めてきちんと捉えていくことが必要。
- 少子化や過疎化が進んでいく中で、異年齢児交流を行うだけではなく、集団教育についてどのように考えるか検討が必要。
- 生成AIが出てきた中で、身体性が重要になると考える。つまり、身体を通した学び、あるいは感覚を生かした学び、例えば子供たちが驚くとか、喜ぶとか、憧れるとか、違和感を感じる、こういったことが今後の学びの土台になることを明示し整理することが必要。

(研修)

- これまでは一人一人の保育者の研修や資質ということが大事にされてきたが、組織としてチーム園の在り方、園間で地域でのネットワークを通しての相互の学び合い、地域で子供を中心とした地域社会をつくるというような視点をどのように入れていくのか。そして、地域にある幼児教育センターやアドバイザーがどのような専門性を発揮することが必要であるのか、その予算立てや制度をどう考えていくのかということについて議論が必要。
- 自治体での研修の在り方を見直していくことが必要。講師を呼んで話を聞いてもらってというような研修のやり方、枠をつくってそこに当てはめていく研修ではなかなか質が上がっていかない。センター等がネットワークの結び目になって、それぞれの園の保育を見直し、高め合っていくような、つないで発展させていくような役割になっていくとよい。
- とても大事なのは研修の在り方。園内だけでは難しいと外部の力をどう使えるかということ、地域がすごく核になってくる。地域の中で実践を持ち寄りたり、公開したり、受けて終わりではなくて、自分のチャレンジテーマの下でこうしてみたいという保育をしていくという往還型の研修は成果がある。
- 1つの事例を深く考えたりすることによって幼児理解を深めたり、それが評価につながっていくということ、それぞれの実践を持ち寄りながら理論と関連づけてまとめたり、共有したり、園に持ち帰っていく研修が広がっている。
- 広く色々な方が同じ土俵に乗るための研修、写真を持ち寄って語り合う、要領・指針に載っている言葉を自分たちの実践を通して理解しようとしていくことが必要。
- 同じ土俵で実践を持ち寄ることのできる架け橋プログラムが鍵ではないか。
- 資質・能力や10の姿の言葉が共通になったことで、幼児教育の施設同士の研修も深まりを

見せている。

- 自治体によって大きく異なるが、施設類型問わず、幼児教育に関する研修が広く門戸を開いて行われていている。
- 公立の園が研修する際に、公立・私立を問わず、保育所、認定こども園を呼んで、研修の場として機能しようと努力している。連携をうまく取りながらみんなで高め合うという動きに少しずつなっている。
- 職員一人一人が客観的に保育を振り返ることができるか、クラスを出て見る、園を出て見る、地域を超えて見るといった取組が必要。
- 今後は、実践者もアドバイザー等の指導者的な立場の人も、遊びと生活の具体的なプロセスの質を見る力をより一層身につけていくことが必要。

(条件整備)

- 幼児教育センターや幼児教育アドバイザーが、園と学校にも関わっていただくような機会があれば、園と学校が相互に学びを中心に高まっていくことができるのではないかと。
- 指導者用資料や教材を作成する際にビジュアル化や IT 化の要素を取り入れ、学生や新任の保育者が分かりやすく入り込みやすくする工夫が必要。
- 現場は多忙感に追われている。現場の業務量を減らして、時間を取って研修・研究を積み重ねていくことが重要。